

農 作 概 況

〔水 稲〕

1. 作付の概況

九州における平成5年度の水稲作付面積は、258,500 haで、前年に比べ2,300ha（1%）増加した。作付面積は、転作等目標面積の軽減措置により前年より増加に転じている。品種別の作付状況を見ると、「3ヒカリ」の作付が上位を占め、ヒノヒカリが九州の水稲作付面積の29.5%を、コシヒカリが17.2%を、ユメヒカリが7.4%を占めた。3品種合計で約55%と、前年よりさらに作付面積割合が高まった。

2. 作柄の概況

九州における平成5年度水稲の収穫量は、94万2,800 tで、前生産に比べて30万200 t（24%）減少した。これは、生育期間の低温・寡照で全粒数が少なかったことに加え、穂いもち病、白葉枯病等の多発、冠水害、倒伏等の被害によるものである。

この結果、九州全体の平均的な作柄は、作況指数76の「著しい不良」で、10 a 当たり収量は365kgとなった。県別の作況指数は、福岡県及び佐賀県が74、長崎県及び鹿児島県が75、熊本県及び大分県が77、宮崎県が83となり、いずれの県も「著しい不良」となった。

3. 生育概況

1) 普通期水稲

田植期は平年並みであった。活着は6月中旬植えが平年並みで、下旬植えがやや不良であった。移植後の6月下旬から8月中旬までの低温・寡照・多雨が生育に大きく影響し、特に7月下旬～8月中旬における日照不足によって穂数が少なくなり、2次枝梗着生数が退化し、m² 当たり粒数が減少した。この場合、m² 当たり粒数の減少程度は出穂前10～30日の積算日照時間と密接に関連し、早生、中生種では著しく減少したが、晩生種では平年並みに確保されたものが多かった。出穂期は低温・寡照の影響で2～8日程度遅れ、成熟期はさらに遅れ、晩生種を中心に2週間以上の遅れのものも多かった。登熟は相次いで襲来した台風による粒ずれや、低温・寡照による不稔粒の発生、出穂の遅れに伴う登熟停止、いもち病の発生等により著しく低下し、不良であった。

2) 早期水稲

主産県の作柄は、宮崎県が作況指数85、鹿児島県が同73で両県とも「著しい不良」であった。

生育概況をみると、田植期は平年に比べて3～5日程度早かったが、出穂期は平年並み～2日程度の遅れとなった。4月上旬～中旬の平均気温が平年に比べ2℃程度低く経過したが、5月中旬から6月上旬にかけて天候

に恵まれたことから分けつの発生が促進され、莖数は平年並み～やや多となった。このため、穂数、全粒数とも平年並みに確保された。しかし、出穂期以降の天候が著しく不良で、登熟の全期にわたって日照不足、低温、多雨により登熟歩合が極端に低下し、減収した。また収穫期に襲来した台風7号による倒伏、浸冠水等で穂発芽が多発し、一部には収穫放棄田もみられた。

4. 被害の概況

被害総量は42万5,200 tで、被害率は34.3%と平年を22.0ポイント上回った。被害種類別では、気象被害が最も大きく22.4%と平均を16.7ポイント上回った。特に、6月下旬～8月中旬まで連続した低温・寡照及び長雨に

1993年産水稲の収穫量及び被害程度

区 分	作付面積	10 a 当り収量	収穫量	作況指数	前年との比較					
					作付面積		10 a 当り収量		収 獲 量	
					対差	対比	対差	対比	対差	対比
	ha	kg	t		ha	%	kg	%	kg	%
九州計	258,500	365	942,800	76	2,300	101	△120	75	△300,200	76
福 岡	54,200	363	196,700	74	500	101	△114	76	△ 59,400	77
佐 賀	36,800	385	141,700	74	0	0	△136	74	△ 50,000	74
長 崎	19,600	329	64,500	75	100	100	△127	72	△ 24,400	73
熊 本	53,500	378	202,200	77	500	101	△114	77	△ 58,600	78
大 分	33,800	367	124,000	77	800	102	△126	74	△ 38,700	76
宮 崎	27,500	370	101,800	83	400	101	△ 96	79	△ 24,500	81
鹿児島	33,100	338	111,900	75	△100	100	△133	72	△ 44,500	72

区 分	総合	気象被害			病 害		虫 害
		風水害	いもち病				
九州計	本 年	34.3	22.4	9.1	9.7	7.2	2.1
	対平年差	22.0	16.7	5.9	5.1	5.0	0.2
福 岡	本 年	32.5	20.7	5.5	10.2	9.1	1.3
	対平年差	21.8	14.9	2.6	6.9	7.7	0.0
佐 賀	本 年	35.1	24.0	8.0	9.1	5.8	2.0
	対平年差	21.7	16.9	4.5	4.2	4.2	0.6
長 崎	本 年	35.8	24.4	10.0	9.0	8.1	2.3
	対平年差	21.3	16.6	4.5	4.7	6.2	0.1
熊 本	本 年	35.1	23.4	6.4	9.9	6.6	1.8
	対平年差	24.9	18.6	3.9	6.3	4.8	0.2
大 分	本 年	30.3	17.5	6.6	10.3	8.4	2.3
	対平年差	18.4	11.4	3.5	6.0	5.4	0.8
宮 崎	本 年	31.1	22.5	14.8	6.5	3.7	1.9
	対平年差	16.0	17.8	11.6	△1.4	△0.8	△0.6
鹿児島	本 年	41.6	26.0	19.6	11.7	7.5	3.8
	対平年差	26.4	21.4	16.0	5.2	4.9	△0.1

注) a) 資料「農林水産統計速報5 73 (生・流 33)」九州農政局統計情報部
 b) △印は“少ない”を示す。
 c) 対平年差は、被害率の差をポイントで示したものである。

より早期水稲では登熟歩合の低下が、普通期水稲では粒数不足、千粒重、登熟歩合の低下が見られた。また台風、集中豪雨等による風水害の被害率は9.1%とみなされ、早期水稲では倒伏、穂発芽の発生が、普通期水稲では葉先の裂傷、粒ずれ等が被害の主因となった。

病害については、被害率9.7%で平年を5.1ポイント上回った。このうち、いもち病は低温、寡照及び長雨により九州全域で発生し、登熟不良を招いた。虫害につちえはコブノメイガの食害が目立った。

以上のように本年は、気象災害、病虫被害とも甚大であった。

(九州農業試験場水田利用部)

〔麦 類〕

1. 作付の概要

九州における麦類の作付面積は、4麦計56,100haで前年より2,300ha (3.9%) 減少した。麦種別面積は、小麦が28,500ha、二条大麦が27,300ha、裸麦が232ha、六条大麦が6haで、前年より小麦は1,400ha (4.7%) 減、二条大麦は1,000ha (3.5%) 減、裸麦は10ha (4.5%) 増、六条大麦は15ha (76%) 減であった。田畑別の作付面積は、4麦計で田作が53,700ha、畑作が2,390haであった。県別では、小麦は各県とも微減となり、また二条大麦は長崎県以外で微減となった。裸麦は、福岡県、佐賀県、長崎県及び大分県で微増であった。

2. 作柄の概要

九州全体の収穫量は、小麦90,000t、二条大麦95,800t、裸麦675t、六条大麦24t、4麦計では186,500tであった。前年に比較して、小麦は7,300t (7.5%) 減、二条大麦は1,300t (1.4%) 増、裸麦は52t (8.3%) 増、六条大麦は67t (73.6%) 減であった。4麦計では、6,000t (3.1%) 減であった。10a当たり収量と作況指数は、小麦が310kg (102) の「やや良」、二条大麦が320kg (110) の「良」であった。麦別及び県別の作況指数は、小麦が94~114、二条大麦が101~113であり、熊本県の小麦が94であった以外はおおむね良好であった。

3. 生育概況

播種及び出芽は順調であった。2月中旬までは暖冬傾向で、生育は促進された。その後、4月中旬までの気温はやや低かったため、出穂は平年よりやや早い程度にとどまった。4月10日に各地で晩霜の被害が発生したが、全体として被害は軽微であった。登熟期の気温は高くなく、好天に恵まれたため多収となった。成熟期は前年よりやや遅れたが、平年よりやや早目であった。

4. 被害の概要

九州における本年の麦別の総被害率は、小麦18.6%、二条大麦13.4%であった。これを過去5か年の平均と比

べると、小麦が3.9%、二条大麦が7.9%少なかった。本年の被害は、小麦、二条大麦とも、湿害、凍霜害及び赤かび病が主なものであった。

(九州農業試験場水田利用部)

1993年度麦類の作柄と被害状況

麦・県別	作付面積 ha	10a当 り収量 kg	収 穫 量 t	10a当 たり 平年収 量 kg	作 況 指 数
全 国	183,600	347	637,800	369	94
九 州	28,500	316	90,000	310	102
小 福 岡	13,200	315	41,600	322	98
佐 賀	7,490	341	25,500	315	108
長 崎	1,060	283	3,000	273	104
熊 本	3,900	254	9,910	270	94
大 分	2,790	347	9,680	304	114
宮 崎	66	255	168
鹿 児 島	61	241	147
全 国	60,600	375	227,500	348	108
九 州	27,300	351	95,800	320	110
二 福 岡	5,690	341	19,400	322	106
佐 賀	15,800	369	58,300	326	113
長 崎	1,390	331	4,600	300	110
熊 本	2,530	300	7,590	299	100
大 分	1,020	326	3,330	313	104
宮 崎	192	281	540
鹿 児 島	741	280	2,070	276	101
全 国	3,280	375	12,300	335	112
九 州	232	291	675
福 岡	16	275	44
佐 賀	7	314	22
長 崎	119	251	299
熊 本	17	282	48
大 分	68	368	250
宮 崎	1	242	3
鹿 児 島	4	225	9

県 別	小 麦		二 条 大 麦	
	被 害 率 %	平 年 差 %	被 害 率 %	平 年 差 %
全 国	23.7	+ 4.2	12.0	-6.1
九 州	18.6	- 3.9	13.4	-7.9
福 岡	18.3	- 1.0	13.2	-6.8
佐 賀	18.5	- 8.9	13.5	-10.2
長 崎	16.1	-13.1	5.7	-16.1
熊 本	25.8	- 1.2	16.9	-6.6
大 分	13.0	- 4.8	13.7	+0.2
宮 崎
鹿 児 島	15.9	-5.9

注) a) 資料：「平成5年度4麦の作柄・被害状況」

農林水産省統計情報部生産統計課

b) ……は事実不詳又は調査を欠くもの

〔カ シ ョ 〕

1. 作付の概況

本年の九州及び沖縄におけるカンシヨの作付面積は、23,599haで前年の約5%減で、全国の減少面積の62%を占めた。これは主産地の鹿児島県、宮崎県においてでんぶん原料用カンシヨの作付が減少したためであり、この傾向は今後も続くものと思われる。現在九州は全国の44%の作付を占め、カンシヨ作の主産地である。しかし関東での減少傾向は九州より少ないことから、このままでは九州は関東の後塵を拝することになろう。

2. 作柄の概況

挿苗期はおおむね平年並みであるが、苗の活着については挿苗後の低温・寡日照により平年並みかやや不良であった。茎葉の生育は7月上旬以降の低温・寡日照のため平均並みかやや不良で、着いも数はやや少なかった。いもの肥大は塊根肥大期の低温・寡日照や長雨により抑制されたことに加え、相次ぐ台風の影響により茎葉の損傷などの被害が発生したことから、やや不良ないし不良であった。このため作柄は近年まれに見る不良となった。

(九州農業試験場畑地利用部)

1993年度カンシヨ作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当たり収量	収穫量	作況指数 (対年比)	前年との対比				
					作付面積		収穫量		
					対差	対比	対差	対比	
	ha	kg	t		ha	%	%	t	%
全国	53,000	1,950	1,033,000	86	△2,100	96	83	△262,000	80
九州	23,500	2,020	475,000	78	△1,300	95	75	△197,000	71
沖縄	433	2,210	9,570	100	2	100	98	△170	98
福岡	339	1,090	3,700	71	△6	98	71	△1,610	69
佐賀	193	1,570	3,030	80	△27	88	84	△1,080	74
長崎	1,420	1,660	23,600	82	△60	96	81	△6,700	78
熊本	1,520	1,840	28,000	79	10	101	77	△8,100	78
大分	442	1,640	7,250	88	△59	88	84	△2,570	74
宮崎	3,170	2,050	65,000	83	△190	94	79	△22,000	75
鹿児島	16,400	2,100	344,400	76	△1,000	94	73	△155,000	69

注) a) △印は減少を表す。

b) 資料は農林水産省統計情報部農林水産統計速報5-285(生産-84)(平成5年12月17日公表)による。

〔大 豆 〕

1. 作付の概況

本年度の大豆作付面積は全国で87,400haで、前年より22,500ha減少した(前年比80%)。九州では12,700haで前年比77%と大きく減少した。このように大きく減少したのは前年に引き続き水田の減反面積が緩和されたこと及び多雨により播種作業ができなかったためである。特に

福岡と大分県で大きく減少した。

2. 作柄概況

6月中旬から10月上旬まで並年より極端に降雨が多く日照の少ない傾向が続いた。このため例年に比べて播種作業は遅れ、排水不良で播種できない所もあった。生育は軟弱で生育量も小さかった。また台風が5, 6, 7及び13号と来襲して茎葉が損傷し倒伏した。10月中旬以降は天気もほぼ平年並みとなったが子実の肥大は並年より悪かった。裂皮粒の発生は非常に少なかった。作況指数は全国の66に対し九州は53と極端に悪かった。特に佐賀、大分及び鹿児島県はいずれも作況指数が50以下となった。10a当たり収量は全国の115kgに対し九州は95kgとなった。収穫量は作付面積の減少と作柄不良のため前年対比は全国で53%、九州で39%となり国産大豆は供給不足の状態が続いている。

(九州農業試験場作物開発部)

1993年度大豆作付面積と収穫量

県別	作付面積	10a当たり収量	収穫量	作況指数	前年との対比			
					作付面積		収穫量	
					対差	対比	対差	対比
	ha	kg	t			t	%	
全国	87,400	115	100,600	66	△22,500	80	△87,500	53
九州	12,700	95	12,100	53	△3,700	77	△19,100	39
福岡	2,350	112	2,630	63	△990	70	△4,520	37
佐賀	3,460	74	2,560	42	△190	95	△5,000	34
長崎	876	96	841	62	△294	75	△1,300	39
熊本	2,660	113	3,010	55	△920	74	△4,540	40
大分	2,110	82	1,730	50	△1,110	66	△2,330	43
宮崎	774	117	906	65	△91	89	△654	58
鹿児島	458	94	431	50	△146	76	△709	38
沖縄	2	108	2	...	1	200	1	200

注) a) △印は減少を表す。

b) 資料は農林水産統計速報5-288(生産86)(平成5年12月21日公表)による。

〔さとうきび〕

1. 作付の概況

1992/93さとうきび年期の収穫面積は、鹿児島県10,448ha、沖縄県17,192ha、合計27,640haで前年に比べて、それぞれ7.2%、7.3%、7.3%減少した。特に鹿児島県熊毛地域(91%)、沖縄県八重山地域(90%)では大きく減少した。

作型の構成は前年とほぼ同様で、春植13.6%、夏植31.1%、株出55.3%であった。種子島地域では春植が多く、宮古・八重山地域では夏植が多い。品種の交替が進行し、NiF8が全地域で急速に普及している。今期の分蜜糖精糖は'92年11月27日に波照間島で始まり、'93年4月

30日の喜界島を最後に全地域で終了した。

2. 作柄の概況

生育旺盛期の'92年6～7月にかけての低温のために全地域で茎の伸長が抑制された。各地に台風が接近し、倒伏、茎の折損が発生したが大きな影響はみられなかった。沖縄県では干ばつ・台風の影響が少なく、全体的には生育順調で10a当たり収量は昨年より高かった。鹿児島県では種子島、喜界島、与論島で増収、他の地域では減収した。

生育旺盛期の低温で茎長が比較的短く受光態勢が良好であったことに加え、成熟期の好天で糖蓄積が進み、製糖歩留まりは各地で高かった。種子島では操業以来2番目の高歩留年であった。両県の成績は表のとおりである。

(九州農業試験場作物開発部)

1992/93年期のさとうきび生産実績

県別	年次	農家	収穫	10a当	収穫	産糖	製糖
		戸数 (戸)	面積 (ha)	収量 (kg/10a)	量 (t)	量* (t)	歩留** (%)
鹿児島	92/93	13,373	10,448	6,381	666,709	84,590	12.70
	91/92	14,413	11,076	6,557	726,297	86,012	11.85
	前年比	92.8	94.3	97.3	91.8	98.3	107.2
沖縄	92/93	29,154	17,192	6,464	1,111,260	137,879	12.30
	91/92	31,458	18,941	6,151	1,165,067	130,356	11.07
	前年比	92.7	90.8	105.1	95.4	105.8	111.1
全国	92/93	42,527	27,640	6,433	1,777,969	222,469	12.45
	91/92	45,871	30,017	6,301	1,891,364	216,368	11.38
	前年比	92.7	92.1	102.1	94.0	102.8	109.4

注) a) * : 含蜜糖を含む生産量。
b) ** : 分蜜糖の製糖歩留り。

(野 菜)

1. 年間の概況

本年度の異常気象は九州地域の野菜生産に大きな影響を及ぼし、特に夏秋期に収穫期を迎える作型では大きな被害を受けた。また秋冬、冬春野菜も播種や定植の遅れから、生育が遅れた。10月以降は気象条件が安定したため生育や生産は回復した。本年度はこのような異常気象の影響と試験研究について、九州地域の公立試験研究機関を対象にアンケート調査を実施したので、その結果を中心に本年の野菜の作柄の特徴について述べる。

2. 九州地域の気象被害の特徴と被害の状況

1) 夏春野菜

全国的には夏期を中心に収穫期を迎えた野菜のうち収量低下の著しかったのは、ナス、ピーマン、トマト、キュウリ等果菜類であり、サトイモ、ネギ、ニンジン等地下に収穫部位のある野菜は比較的その影響が少なかった。レタス、キャベツ、ホウレンソウ等葉菜類は両者の中間

であり、その影響は比較的軽度にとどまった。そして被害の原因は、日照不足と低温が上位をしめている。このため一部の地域では、レタス、ホウレンソウ等では通常年の夏の高温が生育の妨げとなっているのに対し、本年は低温により、生育、収量がむしろ優れた産地もみられた。

しかし、九州地域においては夏秋野菜に関してこのような傾向は認めがたい。ほぼすべての野菜に関して被害の程度は大一甚大となっている。また、減収の原因として多雨（あるいは日照不足、湿害）が最も多く上げられ、ついで台風となっている。これは暖地に位置する九州地域では、昨年の湿度条件でも、主要な野菜の生育に大きな影響を及ぼす程度の低温でなかったため、高湿性の作物の多い果菜類でも、低湿性の根菜類や葉菜類でも湿度の影響が現れなかったことが考えられる。他方、長雨に伴う日照不足、湿害が主要な減収要因として影響した。また当該地域は台風が大きな被害をもたらしたのも特徴であった。このため九州地域で、これらの要因に対する反応には野菜の種類による違いが少なかった。

被害の内容としては、日照不足による生育遅延、軟弱化・小型化や多湿による各種病害の発生が果菜類、葉菜類、根菜類に共通して認められた。さらに果菜類ではキュウリの流れ果や曲がり果、ナス科野菜の着果不良のほか各種生理障害やメロン、トマトの糖度低下がみられた。また台風被害では茎葉の折損や倒伏である。対策としては排水と、葉散が全作物に共通し、一部に緊急避難的に収穫期の調節が行われた。しかし、昨年のような長期間の異常な日照不足、多雨や台風では決め手になる的確な対策が困難であったことが推定される。

2) 秋冬・冬春野菜

全国的には播種から初期生育の期間に異常気象下におかれた野菜は、おしなべて播種・定植作業の遅れ、初期生育の遅延と軟弱化を生じたが、その後の好転により回復したものが多い。影響が残っている野菜としては、キャベツ、ダイコン、ネギ、ハクサイ、ニンジン等があり、おおむね1週間～10日程度の生育の遅れを生じており、収量予測も15～20%減が想定された。病害虫に関しては、その発生はあまり多くない。

九州地域でも秋冬野菜では、播種、育苗、定植の遅れがみられたが、9月以後気象条件が回復したため、おおむね順調な生育を示した。一部に暖秋の影響も認められた。しかし、南九州では台風13号により大きな被害を受けた。また、春～夏に生育期を経過したサトイモでは夏秋野菜と同様に長雨や台風の被害を受け、著しい減収となった。採苗～育苗期に多湿、日照不足の条件を経過したイチゴでは、苗の生育不足、定植・開花・収穫の遅れ、第1花房の花数の減少などの影響を受けた。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

〔果 樹〕

1. カンキツ

1) 温州ミカン

本年度の収量は、前年比で熊本県の普通温州76%を最低にして、ほとんどの県が90%前後で、やや不作年であった。これは福岡県や熊本県を除くと花の量は多く、本来表年に当たったが、6月の日照不足や高温で生理落果が多かったためである。

発芽の時期は、南九州や沖縄県では1週間程度遅れたが、それ以外の地域ではやや早かった。しかし、開花期は4月の低温でいずれの県ともやや遅かった。

果実の成熟期は、福岡県や佐賀県及び南九州ではやや遅れたが、長崎県、大分県及び熊本県では平年並みであった。果実肥大は、6月からの長雨、低温、日照不足で、8月下旬頃まではやや劣ったが、9月以降、極早生温州を除くと平年よりやや良好となった。糖度はいずれの県でも極早生、早生及び普通温州とも0.5~1.0度低かった。酸については、極早生温州では減酸が遅かったが、早生温州では平均並みで、普通温州では早かった。食味については、極早生、早生及び普通温州ともやや不良であった。外観的には、6月上旬の強風、7月、8月及び9月の台風の影響で風傷果が著しく多く、極早生温州では日焼け果が多かった。また、早生温州、普通温州では、浮き皮果が発生した。

病害は、6月以降9月まで降雨が多かったため、そうか病や黒点病が多く発生した。長崎県や佐賀県では、かいよう病の発生も多かった。宮崎県の一部では、褐色腐敗病も発生した。害虫は、全般的に少ない年であったが、福岡県や熊本県ではゴマダラカミキリやウカワマイマイの発生が多かった。

2) 中晩生カンキツ

収量は、鹿児島県と大分県のポンカン、熊本県の川野なつだいだいでは、平年並みであった。他の中晩生カンキツは、前年比90%前後でやや不作であった。特に、宮崎県のポンカンは台風13号の影響で著しく不作であり、前年比62%であった。

果実肥大は平均並みであったが、成熟期は5~10日遅れた。着色はやや遅く、色も淡かった。糖度は、ポンカンでは平年並みであったが、他の中晩生カンキツでは、0.5~1度低かった。酸はやや低く、減酸は福岡県ではやや遅かったが、他の地域では早かった。ポンカンの食味は良好であったが、他の中晩生カンキツはやや不良であった。外観は、風傷果が多く、ポンカンでは温州ミカン同様、浮き皮果が多かった。

病害は、黒点病やかいよう病が全般的に多かった。虫害では、9月下旬以降、福岡県、長崎県及び鹿児島県でミカンハダニの発生が多かった。

2. ビワ

長崎県のビワの収量は、2,820 tで前年比184%であったが、平均比ではやや不作であった。これは、暖冬傾向に推移してきた中で、2月24日の低温で30%が凍害を受けたためである。糖度、酸及び食味は平年並みであった。紫斑病は少なかったが、風傷果が多く、そばかす病が発生したため、外観の品質はやや不良であった。病害虫は、紋羽病やサンホウゼカイガラムシ等のように樹勢が弱った時に発生するものが多かった。それ以外では、サビダニの発生が多かった。

3. 落葉果樹

1) ナシ

収量は、佐賀県を除くと前年比72~95%で、やや不作であった。これは、花の量は平年並みであったが、4月上旬の晩霜害、6~9月の長雨、低温、日照不足のため肥大不良、7月下旬、8月上旬及び9月上旬の台風による落果のためである。特に、宮崎県では台風13号のため著しく低下し、前年比35%の不作であった。果実品質では、着色がやや遅れ、糖度は1度前後低く、食味は不良であった。風傷果が多く外観が不良で、裂果が多い年であった。病害は、輪紋病、うどんこ病、黒星病が多く、虫害では、福岡県でナシヒメシンクイムシ、ヤガ、長崎県でアブラムシの発生がやや多かった。

2) ブドウ

収量は、北部九州地域ではやや不作、中・南九州地域では不作であった。着花量は、大分県のやや少を除くと平年並みかやや多であったが、6月下旬以降の長雨、低温、日照不足や台風による落葉、葉の傷み等が収量減につながったものと考えられた。果実肥大は、平年並みであったが、裂果が多い年であり、着色が遅く色も淡かった。糖度は平年より1~3度低く、減酸は遅く酸高で、食味は不良であった。病害は、全般的に多く、害虫はスリップスの発生が多かった。

3) モモ

収量は、全体的に不作であった。これは、花の量は平年並みであったが、生理落果がやや多く、果実肥大も不良であったためである。着色は平年並みであったが、外観が不良で、糖度は1~2度低く、食味が劣り、品質不良であった。病害はやや多く、虫害はモモハモグリが多く発生した以外は、ハダニやカメムシ類も少なかった。

4) カキ

収量は、全体的に少なく不作であった。早生種では果実肥大がやや不良で、糖度がやや低く、食味は不良であった。しかし、富有は肥大良好で、着色も早く、糖度及び食味も平年並みであった。外観は、全般的に不良で、ヘタスキ果が多く発生した。

5) その他

キウイフルーツの収量は一般に低く、果実肥大も不良で、糖度が低く、食味もやや劣った。花腐病については、長崎県ではやや発生が多かったが、熊本県では少なかった。

た。昨年の貯蔵果では、軟腐病が全体的に多かった。

福岡県のスモモは前年比111%でやや豊作であった。果実肥大は平年並みであったが、着色が遅いうえ、色は淡く、糖度は2度低く食味が劣り、品質は不良であった。

クリは花の量は平年並みであったが、生理落果が多く、肥大も不良で、前年比70%と不作であった。また、外観も劣り、食味も不良であった。

(果樹試験場口之津支場)

〔 茶 〕

1. 一番茶

1月から2月にかけての気温は平年並みないしやや高めであったが、2月下旬以降4月中旬までは逆に1〜2℃低く推移した。4月下旬以後はほぼ平均並みであった。降水量については、4月上中旬がやや乾燥気味であったが、全体としては平年並の降水量であった。

2月下旬以降の低温の影響を受けて、各茶産地とも萌芽が抑えられ、萌芽期は平年に比べて南九州で3〜4日遅れ、北部九州でも産地によっては例年に遅れた。萌芽後の新芽の生育も、4月上・中旬の低温で緩慢となり、摘採期は平年に比べて南九州では1週間程度、北部九州でも大きな遅れを生じた産地があった。萌芽後も4月下旬まで各地で降霜がみられ、特に4月10日には各産地とも強い降霜をみた。4月下旬以降は順調に生育したが、全般に早生種での摘採期の遅れが大きく、中・晩生種との摘採期の差が縮まった。また、霜害のため生育が不揃いとなったところもあった。収量は、南九州では早生種で平年並みかやや減収、中・晩生種で平年並みないしやや増収であった。北部九州では、中・晩生種を中心に平年並みないしやや減収であった。病虫害については、カンザワハダニ、赤焼け病の発生が目立った。

2. 二番茶

一番茶摘採後の気温は各地ともほぼ平年並みで経過したが、5月中旬から6月上旬にかけて最低気温が平年よりやや低めに推移した。降雨は、各地とも5月中旬は少なかったが、6月に入ってかなり多く経過した。新芽生育は、前半は低温のためやや緩慢であったが、後半は順調であった。収量は、一番茶期の霜害の有無、摘採時期の天候等に大きく左右されたが、概して、南九州では平年並み、北部九州ではやや減収となった。病虫害の発生については、クワシロカイガラムシ、カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマ、黒葉腐病、タンソ病が局地的に多発した。

3. 三番茶

二番茶摘採後の気温は、各地とも平年に比べてやや低めに推移し、特に、7月下旬は平年より2〜3℃低かった。降雨は平年に比べて多く、降水日数も多かった。特に、6月中旬以降は各地とも平年比で2〜3倍に達す

る例年にない多雨であった。低温・寡照気味に経過したため新芽の生育は緩慢となり、収量は平年並みとなった。

病虫害の発生については全般に少なかったが、北部九州でチャノココクモンハマキ、タンソ病、南九州でモチ病、タンソ病、クワシロカイガラムシが局地的にみられた。

なお、九州における主要茶産地の摘採期及び10a当たりの生産量は第1表に示すとおりである。

(野菜・茶業試験場久留米支場)

第1表 主要茶産地の摘採期及び10a当たり収量

産地名		一番茶		二番茶		三番茶	
		摘採期 月・日	収量 kg	摘採期 月・日	収量 kg	摘採期 月・日	収量 kg
大 隅	本年	5. 1	603	6. 15	672	7. 22	376
	前年	4. 23	616	6. 8	424	7. 21	382
	平年	4. 24	552	6. 9	449	7. 16	341
知 覧	本年	5. 2	650	6. 17	516	7. 20	399
	前年	4. 23	565	6. 8	568	7. 17	403
	平年	4. 25	557	6. 9	520	7. 16	376
川 南	本年	5. 3	639	6. 15	351	7. 26	318
	前年	4. 25	541	6. 10	543	7. 23	345
	平年	4. 28	649	6. 12	685	7. 18	527
彼 杵	本年	5. 17	305	7. 2	531	8. 3	384
	前年	4. 26	361	6. 16	370	7. 24	285
	平年	5. 3	539	6. 21	450	7. 26	284
嬉 野	本年	5. 3	464	6. 18	376	7. 26	433
	前年	4. 27	528	6. 17	401	7. 27	433
	平年	5. 2	600	6. 18	498	7. 28	407

〔畜 産〕

1993年2月1日現在の家畜別飼養頭数及び飼養戸数を全国と九州地域に分けて表に示した。

1. 肉用牛

1993年2月1日の九州における肉用牛の飼養頭数は、967,900頭で前年に比べて33,000頭(対前年比103.6%)の増加であった。飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県(324,100頭)、宮崎県(242,400頭)、熊本県(142,700頭)であり、この3県で、九州全体の73%を占めている。九州は肉用牛の中で乳用種の占める割合が最も低い地域であり、その割合は17.7%(170,900頭)で、前年よりさらに低くなっている。九州の中では福岡県は例外で、乳用種が主体である。

九州における肉用牛の用途別飼養割合は、肉用種雌牛の割合が高く、53.8%(520,500頭)で、飼養頭数は増加の傾向を示した。肉用種子とり用雌牛飼養頭数の全国に対する九州の割合は43.7%であった。一方、九州の肉用

第1表 家畜飼養頭数及び飼養農家戸数

	肉用牛	乳用牛	豚	採卵鶏	ブロイラー
飼養全国	295.6万 (+2.0%)	206.8万 (-0.7%)	1,078.3万 (-1.7%)	18,870万 (+0.7%)	13,537万 (-1.2%)
頭数九州	96.8 (+3.6%)	19.5 (-1.2%)	302.0 (+0.0%)	3,354 (+1.2%)	6,055 (-2.2%)
農家全国	199.0千 (-5.3%)	50.9千 (-7.6%)	25.3千 (-15.4%)	8,450戸 (-7.8%)	4,448戸 (-5.8%)
戸数九州	80.5 (-5.3%)	5.2 (-6.0%)	6.1 (-16.2%)	1,550 (-7.7%)	1,637 (-6.2%)

注) () 内は対前年比の増減, 採卵鶏は300羽以上の飼養戸数

種肥育牛はかなり増加傾向にあるとはいえ、269,100頭と肉用種の32.6%を占めるにすぎず、全国の割合40.6%に比べて著しく少ない。九州地域は依然、子牛生産基地としての性格が強い。

九州における肉用牛飼養農家戸数は、1993年2月1日で、80,500戸であり、前年対比で4,900戸減少し(-5.3%)、従来からの減少傾向が続いている。1戸当たり平均飼養頭数は、飼養農家戸数の減少に伴って増加し、12.0頭で、前年より1.0頭増加した。全国の1戸当たり平均飼養頭数は14.9頭であり、九州地域の飼養規模は全国よりも小さいが、これは九州地域で繁殖雌牛飼育経営が多いことによるものである。

枝肉価格は、肉用種については昨年までは堅調であったが、景気の低迷の影響で、A4級の比較的高級な肉についても価格が低下した。乳用種については底は打ったものの低水準のまま推移している。子牛価格は枝肉価格を反映して、高水準を保持していた黒毛和種についても低下し、子牛の保証基準価格を辛うじて上回る状態である。褐毛和種は急落したものの、1993年4月の子牛保証基準価格の黒毛和種と褐毛和種の分離を契機として、やや持ち直した。

2. 乳用牛

1993年2月1日現在の九州における乳用牛の飼養頭数は195,100頭で、前年より2,300頭減少(98.8%)している。九州地域で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、熊本県(62,000頭)、福岡県(30,800頭)、宮崎県(29,300頭)であった。九州では、鹿児島のみで増加し、他の6県で減少した。全国では、206.8万頭と前年比99.3%でほぼ横ばいであった。

1993年2月1日現在の九州における乳用牛飼養農家戸数は、5,100戸で、前年より330戸減少(-6.0%)した。九州における飼養農家1戸当たりの飼養頭数は、37.6頭で、前年より1.8頭の増加であった。九州の1戸当たり飼養頭数は、全国平均頭数(40.6頭)より少ないが、北海道、沖縄、東海地域に次ぐ頭数規模となっている。

九州における1993年の生乳生産は冷夏の影響で順調であったが、牛乳・乳製品の消費が低迷し、計画生産を余儀なくされた。

3. 豚

1993年2月1日現在の九州における飼養頭数は302.0万頭で、前年に比べ1千頭増加(+0.0%)している。九

州で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県(134.7万頭)、宮崎県(77.7万頭)、熊本県(28.5万頭)であり、これら3県で、九州の飼養頭数の79.8%を占めた。鹿児島県及び宮崎県では増加したのに対し、長崎県及び大分県では減少した。

飼養農家戸数は、全国で25,300戸、九州で6,070戸で、前年に比べ1,170戸(-16.2%)と大幅に減少した。中小規模経営が減少し、大規模経営が増加した。九州での1戸当たり飼養頭数は497.5頭(前年比80.5頭増加)となった。特に飼養規模の大きな県は鹿児島県(680.3頭)、大分県(590.4頭)で、これらの県は前年も上位を占めた県である。

九州各県では品質の優れた銘柄豚を生産するために、系統豚の造成を進めているが、すでに造成された7系統に加えて、1992年には福岡県で大ヨークシャ種の系統豚が造成され、「フクオカヨーク」と命名された。また、佐賀県ではランドレース種の系統豚が造成され、「サガL」と命名された。

4. 採卵鶏

1993年2月1日での九州における飼養羽数(種鶏を除く)は3,688.0万羽で前年に比べて374.7万羽の増加(+11.3%)で大幅に増加した。飼養羽数の多い県は、鹿児島県(1,240.1万羽)、宮崎県(687.0万羽)、福岡県(652.0万羽)で、これら3県で、九州の全飼養羽数の69.9%を占め、さらに集中度が高まった。

九州での飼養戸数(成鶏雌300羽以上の戸数のみ)は1,740戸で、前年に比べて140戸の減少(-7.4%)した。この10年来減少傾向が続いている。飼養戸数の減少により、1戸当たりの成雌飼養羽数は16,900羽と前年に比べて増加した。1戸当たりの羽数は宮崎県(23,300羽)、鹿児島県(18,700羽)が多い。鶏卵の価格は1993年7月~8月に定値となり、持ち直したが、低水準で推移している。

5. ブロイラー

1993年2月1日の九州の飼養羽数は6,055万羽で、前年に比べて133万羽(-2.1%)減であった。全国の飼養羽数に対する九州での飼養羽数割合は44.7%で非常に高い。九州では、鹿児島県(2,427.7万羽)、宮崎県(2,177.2万羽)の両県における飼養羽数が飛び抜けて多く、この両県で九州の全飼養羽数の76.1%、全国の総羽数の34.0%を占めている。

1993年2月1日現在の九州における飼養戸数は

1,637戸で、前年に比べ108戸減少した。飼養戸数の減少による規模拡大が進んでおり、1戸当たりの飼養羽数は36,988羽で、前年に比べて1,488羽増加した。1戸当たりの飼養羽数の多い県は、鹿児島県(46,200羽)、宮崎県(36,600羽)である。プロイラーのと体価格は、ほぼ横ばい状況である。

(九州農業試験場畜産部)

〔飼料作物〕

1. 作付面積

1993年の九州地域における飼料作物の作付面積は牧草類(イネ科・マメ科の永年生、越年生、1年生を含む)が75,790ha、トウモロコシが27,300ha、ソルガム類が18,700ha、青刈えん麦が7,000haであり、総計で約12.9万haであった。総作付面積は前年に比べ約1,400ha減少しており、作物別では前年と比較して牧草類が600ha増(0.8%)、トウモロコシが1,200ha減(-4.1%)、ソルガム類が600ha減(-3.3%)、青刈えん麦が160ha減(-2.2%)であった。飼料作物作付面積の減少は畜産農家の

労力不足及び円高による、輸入飼料の割安によるものとみられる。

2. 作況

1993年夏の異常低温・日照不足は九州地域の飼料作物収量にも大きな影響を与えた。

牧草：イタリアンライグラスを中心とするイネ科牧草の収量は6,800kg/10aで作況指数(対平年比)98とほぼ平年並みであった。沖縄県の牧草も13,000kg/10a、作況指数96とほぼ平年並みであった。一方、寒地型永年生を中心とするイネ科・マメ科混播草地は3,120kg/10a、作況指数78と低温・寡照により減収した。

トウモロコシ：収量3,950kg/10a、作況指数68と飼料作物中最大の減収となった。

ソルガム類：九州地域(沖縄を除く)の収量5,390kg/10a、作況指数75と減収となった。

青刈えん麦：長崎、熊本、宮崎、鹿児島各県において、それぞれ10a当たり収量4,450kg、3,590kg、2,600kg、4,030kg、作況指数105、101、99、106で平年並みか増収となった。

(九州農業試験場草地部)

1993年の主要飼料作物の作付面積と収穫量

	牧草		トウモロコシ		ソルガム		青刈えん麦	
	ha	t	ha	t	ha	t	ha	t
福岡	2,490	139,400	522	17,000	850	39,800	—	—
佐賀	1,860	127,400	272	8,950	885	39,200	—	—
長崎	6,010	321,700	1,240	48,900	2,580	121,800	811	36,100
熊本	15,900	714,100	7,660	236,700	2,570	142,400	446	16,000
大分	6,900	335,000	1,870	87,500	886	57,900	—	—
宮崎	18,700	1,379,000	8,510	390,600	6,280	348,500	1,040	27,000
鹿児島	19,900	1,343,000	7,190	289,800	4,520	253,600	4,670	188,200
沖縄	4,090	531,800	36	2,140	114	10,600	—	—

注) 農林水産統計速報5-290(農林水産省統計情報部、平成5年12月)による。牧草の大部分と青刈えん麦は1992年秋播き・翌年収穫。トウモロコシとソルガムは1993年播種・収穫。

〔養蚕〕

1. 概況

1993年の九州・沖縄地方における養蚕農家戸数は1,960戸、掃立卵量は26,200箱、収繭量(上繭)は777tでそれぞれ前年より23.7%、34.8%、41.5%減少した。

これは養蚕従事者の高齢化、後継者不足、繭価の低迷を背景として養蚕農家の生産意欲が低下したことによるほか、特に、本年の低温、長雨、日照不足などの天候不順による桑不足によって、蚕飼育を休・廃止した農家が多く、これまでの減産傾向が加速したことによるものと思われる。

2. 作況

1993年春季における桑の発芽は平年より遅く、また、4月10日に凍霜害を受け、桑の発育、収量は平年より劣った。夏蚕期は例年になく低温、長雨、日照不足により、また、初秋蚕期は低温、長雨、日照不足など台風5、7号の影響により枝条の倒伏や軟弱葉が多発したため、生育、収量は劣った。さらに、晩秋蚕期は台風13号(9月3日)の襲来や夏季の天候不順が尾を引き、生育は回復できなかった。沖縄県でも春の低温、夏季の干ばつ、台風の影響で桑の生育、収量は劣った。

蚕作では、春蚕期は各県ともやや不良であった。しかし、繭の検定成績はほぼ平年並みであった。夏蚕期は前述の低温、長雨、日照不足の影響で一部地域で軟化病の発生と小粒繭がみられた。初秋蚕期も夏蚕期につづいて

低温、長雨、日照不足により一部で軟化病、膿病の発生がみられた。晩秋蚕期は夏季の天候不順が影響して桑不足となり、掃立てを遅らせたり、一部では配蚕後廃棄する農家が見られた。また、晩秋蚕期に晩々秋または初冬蚕期の桑まで使用したため、この時期の蚕飼育を休止した農家が多かった。沖縄県では夏季の干ばつ等で蚕作はやや不良であった。

桑の病害虫としては、一部地域で春は赤渋病、クワゾウムシ、夏秋期は褐斑病、クワシントメタマバエ、晩秋期はクワノメイガ幼虫の発生を見た。カミキリ虫の発生は年間を通じて見られた。

なお、本年の台風、蚕病等による被害量は繭換算で245.6トンと前年の2.5倍となった。被害の内訳は台風等気象災害が67.7%、軟化病が8.7%、膿病が9.8%で、本年の天候不順が大きく影響した。

（九州農業試験場作物開発部）